愉快な幻想日常生活

河童のきゅうり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと、山から降りていると幻想入り。

なんじゃそりゃ、と思う少年物語。愉快な生活が始まるのである。

この小説の主人公

山口すばる（２０）元大学生

身長１８０ｃｍジャスト　体重６０ｋｇ

趣味は特になく、散歩するのが大好き

幻想入りするまでは、友達は特にもたない主義だった

特技は指パッチン

ちなみに顔面偏差値は高い方。

この小説は、単なる自己満足によって成り立っているものです。できるだけ原作設定も入れていくので、東方好きの人なら、なお楽しめるかと思います。もちろん、知らない人でも、にわかな人でも、おおいに楽しめることだと思います。（主はにわかです）

言葉使いは初心者並みなので、そこらへんご了承ください。

では、ごゆっくり読んでいってください。楽しいひとときになることを、祈っています。

※これは東方二次創作です。

目次

第１話　幻想入りをしてしまった少年 ―― 1
第２話　自己紹介 ―― 4
第３話　能力というのがあるらしい ―― 9
第４話　指パッチンを操る程度の能力 ―― 14
第５話　天界へこんにちは ―― 19
第６話　泥棒娘の金髪少女 ―― 25
第７話　桃の力は最強だった ―― 31
第８話　住む場所くれた天人達 ―― 37
第９話　たぬきのお姉さん ―― 44
第１０話　いざ、鈴奈庵へ ―― 52
第１１話　規則正しい射命丸です！ ―― 58

第1話　幻想入りをしてしまった少年

「あぁ空気がうめぇなぁ」
いや、実際うまいか分かんないんだけど。
と、一人呟いてる俺は自分で微笑していた。あ、自己紹介しないとだな。俺は山口すばる、いま何をしてるかと言うと日向ぼっこ中ですはい。ひょんなことから俺は幻想入りしてしまったらしい。今からその道のりを話そうと思う。

いつも通りに俺は散歩をしていた。特に趣味はなく、ただそこら辺を歩いていた。その日は天気もよく、自分自身気分がよかった。思いきって山の中を散歩がてら探索してみようと思った。近くに立派な山があったので丁度よかったのだ。少しなにかを期待しながら、俺はその山に足を踏み入れた。そのあとはひたすら山を散歩がてら探索をしていた。
「いやなんも面白いのなくね?」と、思いながら、
ふと空を見ると真っ赤に染まった空に、真っ赤な太陽が俺を照らしつけていた。木の実ひとつあるんかなと、期待していた俺は、
「仕方ない明日も来るか。」と、思って帰ろうとした、いや、後々考えたら明日も来るのかよ。と、その時は思いもしなかったが。
でも、ふと周りを見渡すと少し異変っぽい感じがした。
「な～んで若干周りが白くなってるんですかね?」
そう思った瞬間、一瞬、本当に一瞬だったが、白い光が俺の眼に入るような、そんな感じがして、激しく俺を照らした。
「くっ!」
どっかのアニメにありそうな声を出して、俺は眼を閉じた。
ふと、眼を開けると、なんも変わってなかった。
「……　はっ?」
そんな怒っているような、怒ってないような声が漏れた。

「……　なんもないんかい。」
　景色が変わってる訳でもない、木の実が実った訳でもない、空腹感があるわけでもない。本当に何も変わってもいなかったのだ。
「しゃーない、なんかあるかと思ったが、なんも無さそうだしマイホームに帰ってゲームして童貞らしく過ごしとくか。」
　そう呟いて、帰路をたどった……　つもりだったんだがな。いや、山は抜けたよ？山から無事に生還したんだよ？だけどな、
「何だ……　ここ。」
　俺は、こんな所にこんな建物があるはずがない、そう思いたかったが、実際、そこにあった事実は変えられなかったのだ。あったのは、
「……　神社?!」

　俺は、混乱はしなかった。逆に、少しだけワクワクしていた。見たこともない所に来たと思って、

「神社か……　お賽銭箱はあるし、」
　いや、当たり前だけど
「お金入れて、お参りでもするか。」
　そう思って財布からキラキラと光った５００円玉を出し、お賽銭箱に入れ、お参りをした。俺、いいやつだろ？と、誰に対しても言ってないのに、心の中で、そう勝手に呟いていた。
　その時に、ひょこっと顔を出したと思ったらこっちに近づいてくる人がいた。
「あなたが、お賽銭入れてくれたの？いやぁー助かったわ！これで私は餓死しなくてすむんだものやったわ！」
　一人できゃあきゃあと、嬉しそうに、そして、ただ無邪気に喜んでいた。俺は、
「……　赤い服を着た……　巫女？」
　と、俺は巫女にそう伝えた。

「あら、つい喜び過ぎちゃったわね」
　いや本当に喜びすぎだろ。多分お賽銭箱に５００円入れただけでこんなにきゃあきゃあ喜ぶのは世界で宇宙で銀河で探してもお前だけだろ。
　もちろん言うはずもなく心に留めておく。そう思っていると、巫女が話をし始めた。
「あんた、ここじゃ見かけない顔ね……　人里の人かしら？」
　巫女がそう答えた。それに対して俺の答えは、首を横にふる、だった。
　いや、なんだそれ。自分にツッコミを思わず入れてしまった。と、いうか人里、何それおいしいの？状態だった。
「あら、その反応からして人里の事知らない感じ？」
「うん、まったくわからん。おいしいのか？」
「いや、食べ物ではないわよ……」
　巫女は呆れるようにそう言った。うん、知ってた。
「ひょっとして……　あんた、幻想入りした感じね。」
　巫女は俺がわかるはずもないだろうという謎ワードを発言した。これには俺も、
「幻想入り……　なんだそれ？おいし……」
「はいストップ」
　ストップかけられた。
「まぁ、立ち話もなんだし、とりあえず中に入って色々と説明するとしますか。」
　よっこいしょっと、立ち上がったと思ったら、
「中にどうぞ。色々と説明するし、聞かせてもらうわ。」
　といい、中に入っていった。俺は、
「失礼します。」
　と言い、神社の中に、足を踏み入れた。

第2話　自己紹介

赤い巫女服を着た巫女は、すでに座布団の上に座っていた。いや座るの速くね？まるで年寄りのばb……　うん、これ以上言うのはやめにしようそうしよう。じゃないと俺、殺されるどころか天国も地獄もいけなくなるなうんうん。

「どうしたの？速くそこの座布団に座って頂戴。」

「分かった、b……　巫女さん。」

あぶねぇ、さっき思ってたことが口から出そうになったぜ、間一髪間一髪。と、俺がバカなことを言っていると巫女さんから話し始めた。

「そうねぇ……　まずお互い自己紹介からやりましょう。」

まず、巫女さんからそう伝え、そして、ゆっくりと語り始めた。

「まず、私の名前は博麗霊夢、ここの神社の巫女で、最近の悩みと言えば、お金が全然ないことね。」

だろうな、だって５００円だけであんなに舞い上がるからな。銀河というか、ブラックホールで探してもいないくらいだ。さしずめ、貧乏巫女、って感じかな？と、そんなどうでもいいことを思っていると、博麗は話を続けた。

「あ、ちなみにできれば霊夢って呼んでほしいわ。」

「それはまたなぜ？」

疑問で問い返す。すると、博麗は、

「いや、下の名前で呼んでもらおうとしても、普通の人達はきれいな巫女さんってみんな呼んでくるのよ。こまったものだわ。」

「……」

もうそれで良くね？　そう思ってしまった。

「でも、それも嬉しいんだけど、なんか恥ずかしいというか……　親しく呼んでもらいたいのよ、私は。」

「博麗じゃダメなのか？」

「何となくダメ。」

「なんじゃそりゃ。」

ダメみたいだ。
「他の人に頼みづらいし、あんたなら日常ヘラヘラしてそうで頼みやすかったからなのよ。」
おいこの巫女今メチャクチャ失礼なことといったよな？いったよね？……　否定できねぇ。心の中で、アアアアと叫びながら少し落ち着いて、しゃーねぇー。と、自己完結をした。自己完結っていうかこれ？
「分かったよ、霊夢。」
そう発言したとたん、霊夢の顔は満面の笑みになっておりパァァと、効果音が聴こえてくるんじゃないか。と、そう思った瞬間だった。

「……　は!!」
霊夢は帰って来た、いろんな意味で。
「私としたことが、つい舞い上がってたわ。」
いやまじほんとだよ。かれこれ１０分間ずっとパァァしてたぞ。おかけで俺の足が痺れて痛くて苦痛だったんだが……
でも、不覚にもその霊夢の笑顔を眺めていたのは事実である。いやだってさ？童貞の俺が女の子の笑顔が見れたんだぜ？……　どうしても見てしまうだろ。　そう心の中でぶつぶつ言っていると、霊夢が再び口を動かし始めた。
「あ、大事なことをいい忘れてたわ。」
なにかを思いだしたかように、霊夢は言った。
「私、巫女もそうだけど、妖怪退治もやっているのよ。」
「それメチャクチャ重要なやつやん。」
「忘れてたわｗｗ」
そう言って、霊夢は笑う。まったく……　と、俺は呆れていた……　が、同時に疑問が出てきたので、霊夢に疑問をぶつけることにした。
「待て、妖怪退治ってなんだ妖怪退治って、妖怪なんか出るのか？、こ

こ。」
俺の質問に、霊夢は、
「ええ。」
それだけしか返さなかった。
「え、でもここって日本だよな地球だよな？妖怪なんて昔話でしか俺は聞いたことがないぞ。」
「あら、言わなかったっけ、あんたは幻想入りしたって。」
たしかに霊夢はそう言っていた、けれども、その「幻想入り」という謎ワードがある限り、俺の疑問は晴れることはない。と、いうわけで再び、霊夢に疑問をぶつけた。
「そもそも幻想入りってなんだ？」
たった一言、そう述べると、霊夢は、
「ここは幻想郷。忘れ去られた者が集まる楽園、って言ったとこかしらね。」
忘れ去られた者？つまり、俺はやっぱりボッチだったて事？そして、童貞？……　泣きそうになってきた。
「つまり俺はゴミカスみたいな人生送って来たってことになると言うことだな泣」
「あ～……　でも大丈夫よ！かといって神に見捨てられたわけでもなさそうだし、きっとこの先素敵な青春おくれるわよ！」
「本当？泣」
「ほんとよ！」
「ならいいか！（けろっ）
泣き止むの速！っと霊夢は思うのだった。

「そういえば、あんたの自己紹介、まだだったわね。話し過ぎてわすれてたわ。」
だって話が長いから俺ずっとあんたあんた言われてたんだが。言いかけたが、心に押し留める。そして、俺の自己紹介が始まるのだっ

た。（遅っ）
「俺の名前は山口すばる、まぁ特に趣味はない。しいていうなら、散歩好きかな。森でウェーイしてたら、白い光が俺の眼に入ってきて眼がぁ～眼がぁぁぁ～状態になって、まぁいい、マイホームに帰ろう、と、山降りてたら、な～んでか知らんけど、ここの神社にたどり着いて、そして、霊夢にあった。以上、分かるな？」
「前がカオス過ぎて分かんないんですけど。」
「だろうな。」
　おっしゃる通り、終始カオスである。バカなことを思っていると、霊夢がよくわからないことを言い出した。
「でも白い光にってことは……　あのババァに神隠しされた、って訳でもないってことね。」
「ば……　ばばぁ？」
　霊夢のそんな発言に俺は驚く。
「そう、スキマババァよ、スキマババァ。」
「スキマババァって……　ひどい言われようだな、その人。っていうかスキマってなんだ？、その人はどっかのスキマに住んでるってことか？」
「まぁぶっちゃけ言うとそうなるわね。」
　なんだそれ、そんなよく分からんとこに住んでるのか？そのスキマばぁさんというのは、うん、俺、ババァって言わなかった、偉い偉い。自分で自分を誉めていた。
　すると、ボワン、と音と共になにかが現れた。それは気味が悪く、目が大量にあったのだ。
「うわ!?」
　俺は思わず驚いてしりもち付く。
「あ、やべ。」
　と、霊夢は冷や汗かいて、今にも逃げ出しそうだった。
　するとそこから、白く紫色が混じった服の人がその得体の知れない目からニュッと出てきたのだ。
「れ～い～む～ちゃん？さっきから聞いてりゃあババァババァババァ

ババァと、散々呼んでくれたわね？」
「あ、あはははは……　よし、逃げるが勝ちよ。逃げ……」
どうやら逃げるのが少し遅れて、スキマ女からどキツイげんこつを一発喰らわしたのだった。
それ見て俺は、
「あ～あ……」
と、ただ一人、呆れていたのだった。

第3話　能力というのがあるらしい

霊「＿＿＿＿＿＿っ……！」

霊夢はスキマというやつから出てきた人におもいっきりげんこつを喰らわされて、現在すごく痛がっている。アホなのか、この巫女は。

？「あれほどババァ言うなと言ったのに、この貧乏巫女は……。」

あ、貧乏巫女というのは有名なのね、と、俺は半分呆れ、半分面白がっていた。というか、普通にきれいなお姉さんという感じで、若そうに俺は見えた。……　そして何より胸がデカイ。

？「あっこの巫女の事は一切気にしなくていいわよ。」

変なことを俺が思っていると、スキマの人はそう答えた。

すば「あ、はい。元から一切気にしてませんので大丈夫です。」

霊「ひどい!?」

霊夢がそんな助けてと言わんとばかりにツッコミを入れてきた。いやだってさババァ言う時点でお前の負けなんだよ貧乏巫女さん。そう思わないかい？

？「さて、このバカは置いといて、話は色々聞かしてもらったわ、すばる。」

まるでもう知ってたような口調で発言をする。それにビックリした俺は、スキマ女に、質問をぶつけた。

すば「え……　なんで知ってるの？……　もしかしてストーカーなのか!?」

ヤバイぞストーカーに会ってしまったぞこれは、もといた世界でも俺はストーカーに出会わなかったのに、いや童貞だったけどさ。というか何処にいたのこの人?!いつから聞いてたの?!そんな趣味だったのかこの人!?

頭の中で混乱しまくっていると、

？「いや違うわよ!?急に何言い出すのよ!?失礼ね!?」

すば「だって今の発言からして、今まで霊夢と俺が話してること全部知ってるみたいな言い方だったじゃん！もはやそれストーカーじゃん！警察に通報案件じゃん！あっ、携帯持ってねぇぇぇ！家に置

いてきたあぁぁぁ！」
？「警察!?もしかして外の世界の悪人達を逮捕する人たちね……　って私ダメじゃん！無期懲役なっちゃうじゃん！それだけはやめてぇぇぇ！」
俺達がギャーギャー言い合っている中、霊夢が口をはさんだ。
霊「すばる……」
肩をポンっとされる俺、すると、
霊「こいつは昔からこういう趣味でね……　って痛！」
再びスキマ女にぶたれた霊夢、その光景を見てた俺は、……　懲りないなぁ、と、心の中でそれだけを呟いて、微笑していた。

？「うちの霊夢がすいませんでした。」
霊「いや私らは親子かっ。」
霊夢がオイっ！という感じに突っ込んだ。そんな霊夢を無視して話を続けた。
？「貴方たちが話していたことをずっとこのスキマで聞いていたわ。」
そういって、さっき使ってたであろう「スキマ」というやつをボワンっと再び出した。
すば「それでどうやって聞いていたんだ？」
？「このスキマはね、私の家であり、そして盗み聞k……　人の会話を隠れて聞くことができるのよ。」
いや待て、盗み聞きしてたよね？、ね？もはや自分でいいかけてますやん。まっ、気にしない気にしない。気にしたら負けだ。
すば「ほぇ～なるほど……　どうやって出したんだ、それ。」
たった今、疑問が浮かんだ。
？「あぁ、これはね能力で出してるのよ、能力で。」
能力？なんだその中二病感を出してる感じは？この世界そんなの

があるの？まじで？最高ですやん。
俺は「能力」という言葉に興奮していた。っとまたスキマ女が喋り始めたぞ。
？「ここ、幻想郷には、不思議な能力の持ち主がいっぱいいるのよ。私達みたいにね。」
すば「私達？ひょっとして霊夢も能力持っているのか？」
？「あら、聞いてなかったの？」
すば「いえまったく。」
？「ったく・・・・ 結構重要なことなのになんでちゃんと言ってないのかしら？霊夢ちゃん？」
ここでやっと霊夢が会話に加わった。
霊「うん、忘れてたわ。（2回目）」
すば「しばき倒すぞ。」
自然に口に出してしまっていた。
すば「霊夢はじゃあなんの能力持ってるんだ？」
持ってるとは思えないが、一応聞いてみた。
霊夢「私？私はね～空を飛ぶ程度の能力を持ってるわよ！」
すば「持ってんの!?」
驚いた、貧乏巫女が持ってるなんて。
霊「この趣味悪女は妖怪だけど、私が人間だからって能力がないわけではないわよ・・・・・・。
？「メチャクチャひどい！私、傷ついた。」
傷ついたみたいだ、いやたしかに趣味悪いっちゃ悪いけどな？
すば「じゃあ飛んでみてよ、霊夢さん？」
霊「まっかせ～なさ～い。」
そういって霊夢は外に出てジャンプと共に、空をすいすい飛び始めたのだ。
すば「おーーーーー！すっげーーーーー！」
あっパンツ見e・・・・・・・・・・・・・・・ おっと、やばいやばい。
俺はメチャクチャ興奮した。いつもはゲームやアニメしか飛んでるところを見たことないのに、あの霊夢は平然とやってのけている！

この世界「幻想郷」に来てよかったー！っと、俺は喜びの舞いをしていた。
霊「どう？ここの世界ではこういうの普通だけど、すばるは驚いたかしら？」
すば「はいメチャクチャ驚きましたもう最高ですありがとうございました。」
霊夢が空飛ぶのをやめて、俺にそう言ってきた。俺は興奮しながら答えていた。
？「これで分かったかしら？能力は実際に存在することを。」
身を感じてわかりました、と、心の中で興奮しながら言った。
ここでふと気になることが俺の中に出てきた。しかもごく普通の当たり前のことだが。
すば「……そういえば名前は？スキマの人？」
俺は当たり前のことを聞いた……そしたら。
？「……忘れてましたテヘペロ。」
デコピンを喰らわしたった。
なぜしばかなかったのか、それは怒らすと怖そうだからだ。……ヘタレか俺は。あっそうだ霊夢に退治頼もう、一応妖怪みたいだし、……負けるか、霊夢は。
あきらめた。
すば「ほら、とにかく自己紹介をだな。」
スキマ女はおでこをさすさすしながら、やっと名前を言い始めた。……幻想郷は最初に名前を名乗らんのかな……。
？「私の名前は八雲紫。能力は境界を操る程度の能力、スキマとかを主に使うわね。スキマを使って貴方の世界に通じさせることもできるわよ。」
すば「ほぇ～境界操るとか、俺の世界に通じさせることができるとかチートか何かですやん。」
紫「あなたはもとの世界に帰りたくないの？」
紫が聞いてきた。それに対して俺の答えは――――――
すば「いや、いい。あっちにはなんの未練もないからな。こっちに

いたほうが楽しそうだ。」
すると、紫が珍しそうに、
紫「あら、こういう時って大概みんな、帰りたがるのに……　珍しいわね、すばる。」
俺はそれに対して、
すば「……　あぁ俺は変わり者だからな。」
そう一言、紫にはもちろん、霊夢にも伝えるように、そう言った。

第４話　指パッチンを操る程度の能力

俺は、霊夢に茶菓子を出され、ゆっくりと休憩していた。お茶うめぇ、茶菓子うめぇ、女に囲まれなおうめぇ。

と、訳の分からん歌ができていた。ちょうど小腹がすいていたので、俺の腹は少しずつでも満たされていった、お腹満足な状態になりかけの頃、霊夢が突然ツッコミをし始めた。

霊「な～んでさらっとお茶タイムに一緒に混じってるのかしら？紫？」

紫「いいじゃ～ん、私と霊夢の仲でしょ？」

霊「はぁ……　まったく。」

そう、霊夢だけと一緒にお茶タイムをしてるわけでもなく、ついさっきやっと自己紹介してもらった、紫も混じってお茶タイムをしていたのだ。のほほ～んとしていた、紫は。

紫「こんなにのほほ～んとしたのは久しぶりね～。」

すば「ごもっともだね～。」

霊「二人とものほほ～んとしすぎでしょ……　一応ここ私の家だけど？」

紫「ちょっとくらいいいじゃな～い。」

すば「そうよ～。」

霊「ちょっとすばる。おねぇになってるわよ。」

失敬、俺はおねぇだったみたいだ。……　いや冗談だよ？

俺は正真正銘男である。おねぇの血は混じってないからな？と、そんな事を思っていると、紫がふと思い出したかのように、俺に質問をぶつけてきた。

紫「そういえばすばる、あなたはなにか能力は持ってないの？」

能力の話か。

すば「俺って何かしら能力持ってるのか？全然そんな感じはしないのだが……。

そう、俺は所詮、ただの人間である。散歩大好きな能天気野郎である。取り柄があるわけでもない、なにかが他の人より優れているわけ

でもない、テストの平均は５０～６０程度、うん、優れてないな。結局、俺の取り柄は見つからなかったのである。
紫「おかしいわね……。私にさらわれたわけでもないし……。」
いやそれ自分で言うか？
紫「あなたの話を聞くには、白い光に包まれた的な事言ってたし……。そういう勝手に幻想郷に連れてこられた場合はなにかしらの能力を持ってるし……。なんですばるはそういうのないのかしらね？」
すば「うんそれ俺になにかしらの才能がないってことだよな？」
改めて思う……。やっぱり泣けてくるわ。泣きそうな俺を見ていた霊夢は、こんな事を言い始めた。
霊「う～ん……。あっそういえば。」
なにかを思い出したかのように俺に語り始めた。
霊「どっかで聞いた話によると、自分が得意な事とか、自慢できる事とか……。例えそれが些細な事でも、それが何かの能力に繋がるって聞いたことがあるわよ。」
だれ情報かは知らんが、そうか、些細な事でもよかったりするのか。
すば「ん～……。誰よりも優れてて些細なこと……。んっ……。一つだけあるかも。」
心当たりがあった。
霊「それは何？」
霊夢が気になったのか、ズイっと近づいてきた。

紫「気になるわね……。なんの取り柄もなさそうなすばるが心当たりあるとはね。」
紫も気になるみたいだ。というか一言余計だぞ。
すば「そうだな……。指パッチンが得意だな。」
霊「……。えっ？」
紫「何それ？」
疑問が二人から飛んでくる、いや、当たり前か。
すば「いや、たしかに指パッチンはほとんどの人ができるって聞く

けど、でも、音が鳴らないことがあるらしいんだ。（いや、実際は知らんが。）でも俺の場合はなんでかは知らんが、ずっと連続でやっても鳴り続くし、疲れるわけでもないし、なにより他の人より指パッチンしたときの音がでかいんだよ、とにかく。」
不思議そうに聞いていた二人は二人同時に、
「試してみる価値はあるわね。」
二人揃って、そう言った。
すば「……　やってみるか。」
そうして俺は指を構え、
すば「いくぞ……。」
と言って、指パッチンを繰り出した。パチィン！と、部屋中に大きい音が鳴り響き、
「きゃあっ！」
っとあまりにも大きかったせいか、そんな悲鳴を出した。瞬間、俺の視界には、二人の姿はなく、博麗神社の目の前にいた。
すば「……　はっ？」
と、よくわからない状況の中、俺は自分の手を見て、そんな一言を発していた――――――。

すば「はいただいま。」
部屋の中で驚いていたふたりに、そんな一言をかけた。
霊「何処行ってたの!?いきなり目の前から消えたわよ！」
すば「まじで？俺、気がついたら神社の前にいたんだが？」
紫「確かに神社の前にいたことは確かだったわ……　気を感じたもの。」
紫は気も感じ取れるのか。なにそのアニメでありそうなの。
紫「でも、一瞬過ぎて分からなかったわよ!?一体どういうカラクリ

なの!?」
紫は混乱していた、当たり前だ。よくわからんことになってるし、なによりも俺自身も混乱している。すると霊夢が、もしかしてという感じで、俺に質問してきた。
霊「ねぇすばる……　その指パッチンをするとき、なんか想像してた？」
すば「んっ……　そん時は霊夢のためにお賽銭いれてやろうかと思って神社の前に行きたいなとはおもってたが？」
霊「あら嬉しい。」
すば「そりゃどうも。」
感謝された。それほど金欲しいんか、こいつ。
霊「でもそれよ！」
すば　紫「えっ？」
二人で声を合わせる。
霊「試しに、私のキッチンに行きたいと思って。」
すば「了解。」
行きたいと念じる。
霊「それで、もう一回指パッチンをしてみて。」
わかった、といい、今もう一度指パッチンをしてみた。
すば「……　まじか。」
キッチンにいた……　俺の能力がわかった瞬間であった。
霊「やっぱりね。」
霊夢も納得し、紫も、
紫「なるほど～。」
と、感心していた。そこで、もしかしてと再び思い、キッチンにあった煎餅を、居間に持っていきたいと思い、指パッチンをした……
うん、予想通りに煎餅は居間にあった。
「おー！」
と、二人が声を揃えて、歓喜していた。
すば「なぁ紫。」
俺は紫に聞いた。

すば「これは、なんの能力だ？」
紫「……　これは。」
そうして紫が俺に告げる。
紫「指パッチンで瞬間移動する程度の能力？」
……　いや分かってないんかい。
すば「え、それじゃないのか？」
紫「いえ……　なんか長いなと思って。」
いやそこかよ。
霊「瞬間移動は間違ってないけど……　この際瞬間移動を抜いて、『指パッチンを操る程度の能力』にしましょうか！」
すば「うん、いい響きだ、それで行こうか。」
とうとう、俺の能力がわかった。それだけでアニメの主人公になった気がする。
紫「しかしそれ便利ね～、どこでも行き放題じゃない、その能力があれば。」
すば「いや、紫にはやっぱりかなわないぜ。」
紫「あらあら、嬉しいことといってくれるじゃない。」
そうして、俺の能力が『指パッチンを操る程度の能力』を手に入れた。ダサいかダサくないかはどっかの隅に置いといて、その能力を知っただけで俺は大満足するのだった。

第5話　天界へこんにちは

――――――――――――――――っと、今までの話が俺が今、日向ぼっこするまでの道のりみたいなもんだ。結果的にカオスなことしかなってねぇじゃねぇか。ただ、俺は『指パッチンを操る程度の能力』を手に入れた。それはすごい大きいことだろう、だって、俺も能力というのを使ってみたかったから、子供の頃の夢だったから、今それが叶った、もうそれだけで満足だ。……　んっ？霊夢と紫はどうしたのかって？……　結構身勝手な奴らだった。まず、霊夢は、

霊夢『まず、幻想入りした外来人は、私が人里という所に案内するんだけど……　すばるだったら心配ないでしょ、その指パッチンがあるんだから。』

すば『いや、ちょっと待て、まずその人里というところの方角は知らんのにどうやっていけと？』

霊『あっち方向にあるから、あっちに向かって指パッチンすれば着くんじゃない？』

いやちょっと待て適当すぎだろ霊夢さん。

霊『私は眠くなってきたわ。……　ふわぁ……　お休みなさ～い……。』

すば『ちょっと待て霊……』

寝た、寝坊助かこいつ。

すば『紫、人里という所に連れてってくれないか？』

紫『……　眠い。』

はっ？

紫『……　しばらく寝るわ、またそん時がきたら起こしてね。』

いやそもそもどうやって起こすんだよ……。

ボワンっと共にスキマを出して、

紫『ばいば～い……　ふわぁ。』

と言ってスキマの中に消えていった。うん、寝坊助か？（2回目）

――――――――――――――――とまぁそういう事があり、俺一人で人里に

行こうとしたが、なんとなくそんなノリ気じゃなかったので、←はっ？　　しばらく日向ぼっこしてから行こうと思っていた。
すば「……　そういえば。」
なにかを思いついた俺。
すば「最初に意識的に指パッチンした時に、博麗神社の目の前にいたが……　無意識でパッチンすると、どこかよくわからん所に瞬間移動するってことか？」
そう、俺はあのときに、意識的にパッチンをした。だから神社の目の前に居た、じゃあ無意識で何も考えずにパッチンしたら何処に行くんだ？と、疑問が出る。
すば「……　試してみる価値は……　ありそうだな。」
そう、昔から俺は、気になったところはなんでも試してしまうという癖があったのだ。だから、余計に気になるし、試してみたくなるもんだ。
指を構えた。能天気な俺は、常に無意識なようなもので、やることは簡単だった。
すば「やるか。」
パチィンと辺りに響き渡る、その瞬間、視界が変わった。それだけだったら良かったのだが、一つ、事件が起きてしまった。
すば「……　足が地に着いている感覚がねぇ!?」
そう、つまり俺は、現在空の上だった。浮遊感が初めて感じられた瞬間だった、と同時に死んでしまうという恐怖が込み上げてきたのだった――――――――――――――――――――。

すば「うわぁぁぁぁぁぁ！」
はい、すばるです。俺は現在、落下中でございます。落下してるときに気づいたが、どうやら雲のもっと上までワープしていたようだ。

落下中は、叫びながらも目は閉じていた。だって死ぬもん絶対、まだ目を閉じてる方が１０００倍もましだよ？後は死ぬのをひたすら待っていた。

ただ、ここで何かに着地し、同時に、ドスン！という音が聞こえた。ちなみに、痛くなかった。

？「きゃあ!?」

誰かがそんな可愛い声を出していた。

すば「いててててて……　あっ腰逝ったわこれ。」

腰が逝った、俺は年寄りか。……　落下してるから無理もないか。完結した。

？「!?／／／／／／」

あれ、なんでこの人恥ずかしがってんだ？いまいち状況把握ができてないんだが……　ん、いやちょっと待て。俺はそこでやっと気付いた、なんと、他の人から見れば、俺はこの女の人を馬乗りしている状態になっており、他の人から見れば、ただ襲ってるようにしか見えなかったのだ。

すると、馬乗りしてしまった人が、まるで悲鳴をあげるように大きい声で叫び出し始めた。

？「きゃあああああああああ！変態、痴漢、変質者あああああ!!」

そういって俺を叩き出す。

すば「いてててててて！、ごめんだって！、別に意図的にやってる訳でもないって！」

？「あなた前世五右衛門ね!?こんなことして、大犯罪者を犯していたのね！」

すば「いやなに言ってんのこの人おおおおお!?」

？「とりあえずその馬乗り状態から降りなさあああああい！」

俺たちは、叫びながら攻めと防御を繰り返していた。

？「……」
すば「……　あの～美少女さん？」
？「……」
誉めても美少女さんは、反応がなかった。

説明しよう、俺はあれから今に至るまで、正座していた。いやもちろんこうなることは俺が１０００％悪いけど、俺、正座長時間できないんだよ……。
んまぁ、バツ？的なものを受けていた。
すば「……　あの～……。」
？「私に言うことは？」
すば「あなたに馬乗りというハレンチな行為をしてしまい誠に非常に申し訳ありませんでした。」
呪文のように、俺は謝っていた。
？「ほんと……　私は１００年以上生きてきて、馬乗りされたなんて初めてよ……　黒歴史ができてしまったわ。あなたのせいでね。」
すば「１００年以上生きてるの!?もしかして妖怪なのか!?」
とてもそうには見えなかった。
？「あながち間違いではないけど、私は天人なのよ？そしてここは天界っていうところなのよ？それぐらい当然じゃない。」
ここは天界という場所なのか、というか女の子は天人なのか。それなら当然なのか？……　というか１００年以上生きててその見た目なの？……　幻想郷はなんでもありなんだな。
？「というか、馬乗りの話はどこいったの？」
あ、そうだった忘れてた。自分でテヘペロってなる。そうして、やっと話が戻ってきた。
すば「そもそもあれは誤解だ！俺は本当にわざとじゃない！とりあえず、焦らずゆっくり落ち着いて話を聞いてくれ！」
？「無理。」
すば「なんだとー!?」

？「ぷっ、冗談よ冗談。」
あははと笑う女の子、うん、こいつ殴っていいか？
？「聞いてやろうじゃないの、さっきのハレンチ行為に至るまで。」
すば「その前に足崩していい？」
？「ダメ、罰としてそのまま説明しなさい。」
オーマイガー、……　自業自得ってやつだな、これが。足の痛みを我慢しつつ、順々に話していった。

少年ご丁寧に説明中――――――――――――――――――――――――

？「ふ～ん……　ざっくり言うと、あなたはすばるという名前で、霊夢と紫に合って、色々あって、能力が指パッチンで、ここに来て、私に襲ったと。」
いやそれはちょっとざっくりしすぎじゃね？わりと俺、ちゃんと丁寧に説明したんだけどなぁ。心の中でそういっても、目の前の女の子には届くはずもなかった声であった。まっ、俺は。
すば「おっしゃる通りです。」
そう答えることしか出来なかった。
？「まったく……　この比那名居天子に馬乗りを仕掛けようとは……　これは何かの罰が必要なようだねぇ？」
天子というのか、この子は。ニヤニヤしながら、天子は俺に罰を出してきた、うん、もうドンとこい。
俺は構えていた。
天子「おつかいに行ってもらうわ。」
すば「……　へっ？」
思わず驚く。だって馬乗りしたんだぜ？こんな世界で一番優しい罰でいいのか？
天子「丁度、『ごはんの材料が切れたぁぁぁぁ！』って『衣玖』が発狂してたしねぇ。」

ウンウン、としながら天子はそう言う。
すば「その『衣玖』って奴はキチガイかなんかなのか?」
思わずつっこんでしまった。だって材料切れただけで発狂するって初耳だぞ。
天子「そういうわけで、初めてのおつかい、頼んだわよ、変態さん。あ、BGMはきちんと流しておこうか?」
すば「だからあれは意図的にやった訳じゃ………　というか変態というレッテル貼らないでございます?あと、BGM流すってどっかの番組みたいにするんじゃない。」
つっこみを三つぐらいいれてやった。うん、突っ込み役やめていいっすか?俺。
すば「とはいってもなぁ、俺人里の場所分かんねぇぞ?どこにあるんだ。そこ?」
天子「えっ、霊夢から聞いてないの?」
すば「聞く前に寝た。」
天子「あんのバカ巫女……。」
天子は霊夢に呆れていた様子だった。まぁ、当たり前か。
すば「まぁ、とにかくあっち方向に人里があるのだろう?」
指を指しながら言った。
すば「指パッチンもあるし、じゃ、行ってくるわ。」
俺がそう言い、天子は、
天子「うん、いってらっしゃい。」
『パチィン!』と共に、天子から視界が外れた。

そうして、変態行為をしてしまった俺は、罰として、天子に初めてのおつかいをやらされるはめになった。
———初めてのおつかいではないんだけどなぁ。そう思いながら。

第6話　泥棒娘の金髪少女

スッと、俺は瞬間移動で人里というところに来た。
すばる「おお……　なんとも賑やかなところだな。」
こんなに賑やかな光景見たのは久しぶりだ。外の世界に居たときはこんな光景中々見なかったからなー。……　田舎に住んでたというところもあったが。あちこちからいろんな声が聞こえてくる。あははは、という笑い声から、マミー、お団子食わしてくれないか？という、声が聞こえてきた。そんな中を俺は一人歩き、天子に頼まれた材料を買いにいっている最中だった。
すると、パシッとなにかを奪われたような音がした。
すばる「えっ？」
ビックリした俺は思わず後ろに振り返る。後ろには、金髪の魔法少女らしき人物が、走っていったのを目の当たりにした。
すばる「……」
ポケットを漁る、案の定なかった。どうやって盗んだの？
すばる「……　はぁ。」
と、ため息をつく。そして俺は、天子の貰った金とメモ帳が入っている可愛らしい桃が付いたポーチにめがけて、指パッチンを繰り出した。
『パチィン！』
可愛らしいポーチは帰って来た。
すばる「やったぜ。」
一発かましてやった。この能力は取り返すと言う意味でも使えるな……　我ながらいい能力を持ったもんだ。すると、ちょっと遠くにいた金髪の魔法少女らしき人物は、なにか焦っていた。まぁ、突然ポーチが消えているからな、そりゃまぁ焦るだろう。
すると、こちらに走って近付いてくる、金髪の魔法少女らしき人物、
すばる「うん、めんどいことになる前に逃げるか。」
と言ったものの、少し逃げるのが遅かったみたいで、俺は肩をガシッと掴まれた。そして、

？「すげーなお前!?どうやって私から奪い返したんだ?!」
と、金髪の魔法少女らしき人物は、言うのだった。

すばる「まず、俺からこの可愛らしいポーチを盗んだことを謝ろうか？」
？「う、ごめんなさいだぜ……。」
金髪の魔法少女らしき人物はちゃんと謝った。うん、礼儀はちゃんとしてるんだな。
すばる「な～んで人のものを盗むんだ、泥棒はいけませんよ？」
？「私は昔からそういう趣味なんだぜ！」
すばる「自慢気に言うなよ！」
なにいってんのこの人?!というか、口調は男っぽいのな。
すばる「まったく……　お前、名前はなんて言うんだ？泥棒したのだからな、名前は覚えておかんとなんか嫌だ。」
？「なんじゃそりゃ。」
いやだって泥棒されただけで終わらせるわけがないよなぁ!?なんか名前知らんと負けな気がするし……　俺だけかひょっとして？
……　とりあえず名前は聞いておこうというだけだ、名前を知ることは大切だからな。そして、金髪の魔法少女らしき人物は名前を名乗るのだった。やっとこれで金髪の魔法少女らしき人物と言わなくて済む、というのが本音なのは内緒。
？「私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだぜ！」
『魔理沙』、いい名前じゃねぇか。中二病感がする感じ、俺は好きだぞ。でも、こんな可愛らしい金髪少女が泥棒なんてありえないな。いっそグラビアアイd……
魔理沙「私は名乗ったぞ！次はお前が名乗る番だ！」
ビシッと、俺に指を指してきた。俺は笑いながら、

すばる「あぁ、そうだな。」
また、おれの長～い自己紹介が始まった。
すばる「俺の名前は山口すばる、能力とかは……」
少年熱心に説明中……

魔理沙「ほぇ～すごいなおm……　じゃなかった、すばる、指パッチンで発動できるという能力がかっこいいよな。それがあればどこでも移動できるじゃん。」
すばる「まぁ無意識に発動したら色々とめんどいことになるけどな。」
魔理沙「そうなのか？」
すばる「あぁそうだ。」
ついさっき天子に馬乗りする事件があったからな。なんて、口が裂けても言えねぇ。
魔理沙「すごいな～もしかしたら使い方によってはなんでもできるんじゃないか？」
すばる「……　さぁな。」
実際この能力はあまり使ったことがない。もう少し慣れてから、ほかに出来ることを試していくとするか。俺はそう考えて、自分の手を見ていたのだった。
すばる「そういえばその右手に持っているものはなんだ？なんかの魔法使いの器具の一種なのか？」
なんかすごく気になるので質問してみた。
魔理沙「あぁこれか？」
スッと、俺に見せつけてくる。
魔理沙「これは『ミニ八卦炉』って言うんだ。かっこいいだろ？」
すばる「ミニ八卦炉、名前の響きが良い、かっこいいな、それ。」
魔理沙「これ、『こーりん』が作ってくれたんだぜ！」
すばる「こーりん？誰だそれ？」
急に知らん人の名前が出てきたので問い返す。

魔理沙「また今度紹介してやるよ。」
今度にされた。
すばる「そのミニ八卦炉というのはどーゆー事ができるんだ？」
魔理沙「弾幕はもちろん、私の必殺技、『マスタースパーク』が撃てるぜ！」
すばる「そのマスタースパークは強いのか？」
強さが気になったので魔理沙に聞いてみた。
魔理沙「あぁ、ものすごく威力も高いはずだぜ？」
ミニ八卦炉をペン回しごとく、くるくると器用に回してながら、自慢げにそう言った。
魔理沙「なんならここで試してやろうか？」
すばる「えっ、いいんか、それ？」
魔理沙「し～んぱ～いないさ～。」
もはや心配しか込み上げてこねぇよ。
魔理沙「じゃあいくぜ？」
魔理沙がミニ八卦炉を上空に構え、光がそこに集まっていくのが見えた。……　それは、ものすごく幻想的で、脳みそにやきつけたくなる、それぐらいキレイだったのだ。
魔理沙「マスター……」
魔理沙がそう言うと、
魔理沙「スパーク！」
マスタースパークと唱えた瞬間、ミニ八卦炉から出してるのは思えないくらい、そして、はかいこうせんを超えるであろう威力とスピード、そのビームはとてもきれいで、幻想的であった。そのぶん、風圧がすごく、いまにも飛ばされそうなぐらいだ。
すばる「くっ……。」
俺は飛ばされないように、身構えていた。魔理沙を見ると、へへっという感じの顔になっていた。……　すごいよ、魔理沙。
ひゅん、と、マスタースパークは終わり、
魔理沙「どうだ！私の自信作なんだぜ！」
俺は拍手しながら、

すばる「すごい、俺なんかより、はるかにすごいよ。」
魔理沙は照れるように頭をポリポリ掻いていた。おつかいだけでこんなきれいな物を見れて、俺は大満足だった。……ただ。
村人Ａ「こら魔理沙くん！ど真ん中でマスタースパークを撃つんじゃない！」
村人Ｂ「そうよ、魔理沙ちゃん、風圧がすごいから、できるだけやめってってあれほど言ったのに！」
魔理沙「えへへ、ごめんなさいだぜ～。」
舌を出しながら謝っていた。まぁ自業自得？なのかな？でも、実際撃ってみてと言ったのは俺でもあるので、そこは黙っておこう。と、心の中でそう決意した。

魔理沙「それじゃあ私はそろそろ帰るんだぜ。あっでもちょっと待ってくれ。」
ポケットから一枚の写真を出した。それを俺にハイッと、渡してきたのだった。その写真は、なんとも不気味な家だったのだ。
魔理沙「すばるはその指パッチンがあればどこにでも行けるんだろ？この写真は私の家だから、またいつか来るときに写真みながらパッチンでもして、また来てくれ。そん時には、『こーりん』を紹介してやるよ。」
いやこれ魔理沙の家なんかい。不気味なんですけど？ここでなんかの実験でもしてんの？　なんてことは口に出せるはずもなく、しっかりと心のタンスに閉まっておいた。
すばる「あぁ、分かった、それじゃあな。」
魔理沙「じゃーな！すばる！」
そして魔理沙はほうきに股がって、空を飛んでいった。これぞ魔法少女って感じだな、と俺はそう心の中で呟いたのだった。

すばる「これとこれ、……　あとこれもか、よし、これでＯ

Ｋ。」

すっかりおつかいを忘れてた俺は、八百屋さんに来て、頼まれた品を買いにきていた。

すばる「遅くなったな……　天子怒るかな。」

何てことを思いながら。

店長「おう兄ちゃん、いい買いっぷりだねぇ！」

すばる「ははは……　ありがとうございます。」

店長「はい、合計２５６０円ね。」

お金はなんとぴったしあった。……　天子、計算は得意なのか、そこら辺は気を使ってくれたのだろうか。

すばる「……　サンキューな。」

聞こえはしないが、感謝しておいた。

店長「まいどありぃ！……　そういえば、さっき見えたビームはひょっとして魔理沙ちゃんのかい？」

あれ、見てたんだ。

すばる「はい、そうですけど。」

店長「やっぱりか……　まったく、ビームを撃ったりすると、風圧で品物がだいなしになっちゃうのに。困ったものだねぇ。」

おい魔理沙、何てことしてくれたんだ。（震え）

こうして、おつかいの旅は、幕を閉じた。結局道中はカオスだらけであったが、なんとかやり遂げたので結果オーライ、という事でＯＫ、かな？

すばる「――天子、怒ってないかな～。」

怒ってないことを願いつつ、天界に向けて指パッチンするのだった。

第７話　桃の力は最強だった

俺は天子の家の前にいた。

すばる「……　やべぇな、結構時間が経っちまってやがる。」

俺は困惑していた、なんとおつかいだけで１時間半ぐらいかかってしまっていたのだ。飛んで人里に行く、または歩いて人里に行くなら確実に遅くなるからＯＫなのだが、瞬間移動で移動してるとなると、３０分もかからないはずだ。これもなにもかも魔理沙のせいだ……　まったく。（マスタースパークに興味あったのは内緒。）ドアノブを持ち、ゆっくりと引いた、……　そしたら天子が誰かと話していた。俺の存在に気付いたのか、ひょこっと顔を出した。……　なんでこいつは赤面してるんだ？

天子「あっ……　お、おおお帰りなさい。」

すばる「？、どうしたんだ？」

？「いろいろあったんですよ、総領娘様は。」

すばる「????」

見知らぬ人はそう言った。

天子「（馬乗りされたときに、衣玖に見られてたことと、もしかしたらパンツ見られたかも知れないとは口が裂けまくっても言えないわね……。」

衣玖「……　ふふっ。」

くすっと笑っていた。……　なぜだ？

すばる「あっ、頼まれてたもの、全部買っておいたぞ。」

おつかいを頼まれていた俺は、野菜や肉などの材料などを、天子に渡した。

天子「あ……　ありがとね。」

まだ顔が赤い様子、うん、なぜだ？（２回目）そう思っていると、天子が野菜や肉などが詰まったビニール袋を、先ほどふふっ、と笑っていた見知らぬ人に手渡した。

衣玖「わぁ、ありがとうございます！これでしばらくは材料に困ら

ないですよ！ありがとうございます、すばるさん。」
すばる「えっなんで俺の名前を知ってんだ？」
驚いた、当たり前だ。初対面の人の名前を普通知るはずがないのだ。
衣玖「すばるさんのことは、大方総領娘様が話してくださいましたよ。」
わぁ、サンキュー天子、おかけで説明する手間がなくなったぜ。ぶっちゃけ言うと、俺の自己紹介をすると、外来人だからか、色々と質問攻めをくらう。もうそれはこりごりである。
すばる「じゃあもしかしてあなたが……」
衣玖「ええ、いかにも、私が永江衣玖ですよ。」
予想通りだった。天子から色々と聞いていたからな。
すばる「じゃああなたが材料切らして発狂してた人って事だな。」
そう言うと、衣玖は、赤面し始めた。発狂されていた事実を、知られたくなかったんだろう。だって、俺は少しからかったからな。
衣玖「ちょちょちょちょちょちょっと!?総領娘様!?なんでその事を言ったんですか!!誰にも言わないでくれってお願いしたはずなのに!?」
天子「えぇ……　だってあまりにも面白かったよ。これは言わなければ！って思っちゃったほどだしね！（キリッ）」
衣玖「かといって、言っちゃダメと言うもんもあるでしょょょょょ！もういいです！さっき総領娘様が言ってたことも全部すばるさんにばらしちゃうもんね！」
そう言うと、天子は再び激しく赤面し始める。
天子「ダメダメダメダメ！それだけは言っちゃダメぇぇぇぇぇ！」
そんな天子を無視して衣玖が俺にさっき天子が言ってたのであろう事を言った。
衣玖「あのですねすばるさん！あなたが総領娘様に不慮の事故で馬乗り状態になった時に、総領娘様がすばるさんにもしかしたらパンツ覗かr」
天子「わぁ！わぁぁぁぁぁぁぁぁそれだけは言っちゃダ

メぇぇぇぇぇぇ！」
すばる「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
天子と衣玖は謎の言い合いをしており、それを聞いていた俺は、我慢できずに、うるせぇぇ！と、言うのだった――――。

衣玖「そういえばすばるさん、おつかい行ってくれたんですよね？お礼と言えばなんですが、一緒に夕食でもどうですか？」
どうやら、もうそんな時間なようだ、台所から、いい臭いが漂ってくる。おつかい行ってくれたお礼として、一緒に夕食を食べさしてくれるらしい、それは俺にとって丁度良かった。なんせ昼は霊夢と紫と一緒に茶菓子食ったくらいだったからな、丁度腹が減っていたのだ。でも、そう思うと同時に、本当に良いのかという、気持ちが溢れてくる。俺と一緒に夕食を食べるなんて良いのか？天子のほうを見る。
天子「良いんじゃない？おつかい言ってくれたのはまぎれもないすばるなんだし、それに衣玖はもう三人分作ってくれたみたいよ。」
すば「まぁ準備がお早い事で。」
衣玖「いえいえ、そんなことはないですよ。」
どうやら、元から三人で一緒に食べる予定だったらしい、それじゃあお言葉に甘えて一緒に食べさせてもらおうかな？
すば「じゃあお言葉に甘えて…………………　食べさしてもらおうかな！」
ソファーでくつろいでいた俺は、よいしょっ、と体を起こし、料理が並べられている、テーブルに向かった。
すばる「おぉ…………………　こりゃすげぇ。」
ものすごく美味しそうな料理がいっぱい並べられていた。
衣玖「いっぱい食べてくださいね。」

そう言ってから俺達は、手を合わして、
「「いただきます！」」
と言って食い始めるだった。
うん、これもうめぇ、あれもうめぇ、衣玖の料理はめちゃうめぇ。めちゃくちゃ美味しい。こんな美味い料理を食ったのはかなり久々だ。いつもはコンビニ弁当やインスタントで済ましてたからなぁ。
衣玖「どうですか？お口に合いますか？」
すばる「ものすごく美味しい、久々だこんなうまいもん食ったの！」
天子「あいかわらず衣玖は料理がうまいねぇ。」
俺達二人はひたすら衣玖の料理を食べていた。
衣玖「ありがとうございます、お二人とも。」
いやほんとにうめぇなぁ。
天子「あっそういえば。」
なにかを思い出したかのように、天子はそう言った。
天子「すばるがおつかい行ってたときに、ここから少し遠いところにきれいなビームが見えたんだけど……ひょっとして……」
あぁ魔理沙のマスタースパークの事か。あれ、見えてたんだ。いやどんだけそれぐらいでかいんだ、あのビーム。
すばる「あぁ、魔理沙のマスタースパークのことか？」
一応質問してみる。
天子「あら、魔理沙に会ったの？」
すば「あぁ、色々あってな。」
すると、呆れるように、衣玖は言った。
衣玖「はぁ……また魔理沙がマスタースパークを撃ったんですね……懲りないですね、あの人は。」
まぁ何回かやっちゃってるらしいからな。
天子「ていうか私のポーチ奪われなかった？大丈夫だった？」
衣玖「あの人は物を奪うのが得意ですからねぇ……」
どんだけ有名なんだ魔理沙は、泥棒でだけど。
すばる「あぁ、当たり前のごとく奪われた。」

天子「いやどうやって取り返したの!?」
どうやら、どうやって取り返したか気になるらしい、……　奪われたら取り返すの困難なのか？
すばる「んっ、お得意のこれでさぁ。」
『パチィン!』と同時に、俺達が食い終わった食器達がキッチンの流しの所に移動した。
衣玖「……　本当にその能力は便利ですね。」
天子「その能力があれば取り返せるのも納得がいくわね。」
だろ？と、思う俺、この指パッチンは何でもいかせそうだなぁ、今度色々試してみよっと。何てことを思っていると、天子が毎日恒例のように、物言い出した。
天子「さて、食後といえば、やっぱり『桃』ね。」
どん!と、普通より少し小さいぐらいの桃を三つ置いた。
衣玖「……　これも少し飽きてきましたね。」
天子「えぇ……　まぁそうね。」
桃を食うのに飽きている二人の姿がそこにあった。そういえば少し奥のところに、桃がいっぱい実っていたな、あれか。
すばる「なんで飽きてるんだ？普通に美味しいと思うんだが？」
天子「私達は毎日これを貪り尽くしてるからね。そりゃあ何個も何個も食ってたら飽きるわよ。」
とは言いつつ、普通に丸かじりしながら桃を食べている。俺も桃を丸かじりで食い始めた。あぁ、懐かしいなこの感じ。昔はよくリンゴやきゅうりを丸かじりしていたからなぁ。ん？この桃、かじった瞬間に体に不思議な感覚がする。なんだこれ？
すばる「なんだこの桃……　不思議な感じがする。」
衣玖「それはその桃が『仙果』というやつですからね。」
すばる「仙果？」
天子「神仙に霊力や不老長寿を与える実ともされているものよ。天人の主食でもあるし、この仙果には体を鍛える効果もあるのよ。食べるだけで身体能力が上がるし、なにかと便利なのよ。」
ご丁寧な説明をありがとう、あ、そういえば天子の帽子にもその桃

がついてるじゃん。と、桃を噛りながら、心の中でそう言っておく。
天子「だからね…………………すばる。」
すばる「えっ？」
そう言って、なんか剣を構え出したぞ!?
天子「私天子、今からこの『緋想の剣』ですばるの命を頂戴いたす。」
すばる「いや待て待て待て待て！」
そう言いながら衣玖をちらっと見た。俺が見たことに気付いたのか、衣玖は、
衣玖「がんば♪」
すばる「おいいいいいいい！」
そう言って、天子が、てやぁ！と言いながら、緋想の剣を俺にブスっとぶっ刺した。
すばる「……………………へっ？」
不思議と貫通せず、痛みも感じなかった。
天子「ね?すごいでしょ?これが桃の力よ?」
すばる「チートアイテムじゃねぇか、それあれば世界征服どころか宇宙征服もできるぞ。」
衣玖「それまたスケールがでかいですね…………。」
天子「もちろん、自分に刺しても、（ブスブスっ）ほら、痛くもないし、貫通しないいし、出血もしないでしょ?」
あなたはドMか何かですか?普通にブスブス刺していますけど。
桃の話で盛り上がっていた三人、……………………………こんなで盛り上がるの世界で俺らぐらいじゃないか?
と、俺は一人で呆れていたのだった
。

第８話　住む場所くれた天人達

すばる「そういえば俺、家がなかったわ。」
夕食を食べ終えた後、突然そんな事を言い出す俺、そう、俺には家がないのだ。今は天子の家に居るのだが、さすがに長居するのは迷惑だろう。人里に良い物件ないかなぁと、う～んと思っていた。
天子「あれ、あんた家なかったの？（ムシャムシャ）」
すばる「いやあの桃を食べながら喋るのやめてもらいませんか？」
衣玖「そうですよ総領娘様、非常に行儀が悪いですよ。（ムッシャムシャ）」
あんたもだよ！と、心の中で怒る。桃をペロッと食べた天子は、話を続けた。
天子「でも博麗の巫女には会ったんでしょ？そん時に人里の方に案内してもらえなかったの？外来人が来たら普通それをするのが巫女の役目なんですけど？」
すばる「思いっきり眠いと言って寝てましたあのぐーたら巫女。」
言葉を並べてそう言った。
衣玖「どうしようもないですねあのぐーたら巫女。」

霊夢「へーくしょい！」
……　誰かが私を噂している？……　そういえば、すばるはどこ行ったの？

天子「何やってんのよほんと……　ちょっと待ってて。」

天子がそう言ってはリビングから出ていく。
すばる「どこ行ったんだ天子は？」
俺が疑問に思っていると、衣玖がすごい事を言い始めた。
衣玖「……　ひょっとしたらここに住まわしてくれるかもしれないですね。」
すばる「えっ？」
突然そんな事を言い出した。
すば「えっでもそれかなり迷惑なんじゃないか？ここに住まわしてもらうのは嬉しいっちゃ嬉しいんだけど、……　その分色々と面倒じゃないか？だってご飯は三人分必要になるし、なにしろ俺がこの家に住むことによって、せまく感じるんじゃないか？」
俺はできるだけ二人には迷惑は掛けたくないのだ。空腹な俺にご飯食べさしてくれたし、さらに今はここに住まわしてくれようとしてくれている。そんな事が許されるのだろうか？
衣玖「……　たしかにそうかもしれないですが。」
でも、衣玖はゆっくりと、優しい声で、俺に言った。
衣玖「あの人は正直いって、何考えてるか分かりません。」
それは確かにそうだ、急に自分の体に剣をブスブスさす奴だからな。
衣玖「ですが……『気に入った』事にはなんでもしようとする人なんです。」
すばる「へっ？」
衣玖「だからひょっとしたら……」
そして、ものすごい可愛い笑顔で俺に告げるのだった。
衣玖「あなたはきっと、総領娘様に気に入られたかもしれないですね――――――――――――――――。」

天子「うん、空き部屋が一つあったよ！」

リビングのドアをバンっと思いっきり開けた。いや壊れる壊れる。
天子「へっ変な意味じゃないけど…………すばる、丁度空き部屋もあることだし、いっそここに住んじゃえば？」
衣玖「ねっ？なんだかんだいって、総領娘様は優しいお方なんですよ。」
そう天子に聞こえないぐらいの小声で俺に伝えた。そのあとに天子に向いて、衣玖は言うのだった。
衣玖「私はそれに賛成ですね。丁度最近暇でしたし…………そのあとにゆうて桃を貪るか、雲の中を泳ぐ事ぐらいしか私もやることがなかったし………すばるさんが一緒に暮らすようになれば、暇な日はきっとないはずですよ。」
いやその前にあなた方はどんな生活を今までしてたの？この二人、桃中毒者になってそうで怖いんですけど。
天子「ほら、衣玖もそういってることだし…………どう？」
俺に答えを聞いてきた。もちろん俺の答えは。
すばる「もしも俺が居て迷惑じゃないんだったら、お言葉に甘えて………いいかな？」
すると、二人は顔を向き合って、嬉しそうに俺に向いた。
天子「そういえばこれは何気に初めて言うわね……。」
衣玖「ふふっ………そうですね、言う機会がありませんでしたしね。」
そう二人が言った後、満面の笑みで、俺に告げるのだった。
「「ようこそ、天界へ！そして、これからよろしくお願いします！」」
俺の顔と耳は、若干、赤く染まっていたのだった――――。

すばる「天界って、本当にやることがないのか？」
部屋もあり、天界の天子の家に住むことになっていた俺に、疑問が

溢れていた、だってさ、天界といえば、まぁいわゆる神的な存在であって、人間達を見下してざまぁないわ！って言ってそうなんだが。だが、実際蓋を開けてみればどうだ？ただ桃を貪り尽くしているだけの天人達だぞ？

衣玖「ゆーてここはやることはない、というか無さすぎるんですね。」

すばる「なんか事件とかさ、そういう事とか今まで無かったのか？」

一つや二つ、きっとあるはずだ。

衣玖「そうですね……　今から約１１年前くらいに総領娘様が自分で異変を起こしたぐらいですかね。」

すばる「いやなにやってんだ天人のくせに。」

衣玖「それよりももっと前に何度か大きな異変がたくさんありました、総領娘様は異変というのにゾクゾクしていたようでして、総領娘様は自ら異変を起こしました……　その異変内容が……」

はぁ、とため息をつきながら、そして、呆れるように言った。

衣玖「……　博麗神社だけが倒壊する異変です。」

はぁ？対したことないじゃん、あの霊夢だったら、ホームレスでも生きていけるだろ、きっと。

すばる「どうやって倒壊さしたんだ？」

衣玖「総領娘様は自ら『大地を操る程度の能力』で神社だけピンポイントに地震を起こして、倒壊させたんですよ。」

ただの害悪野郎じゃねぇか。え、というか天子って大地操れんの？じゃあ幻想征服出来るじゃん。幻想郷全体をばーんと崩壊させて、そして真の神になってだな。

幻想征服という、パワーワードを勝手に作っては興奮していた。

すばる「異変を起こした動機というのは？」

衣玖「……　天界での退屈な生活への不満と、妖怪が起こした異変を巫女が解決するという楽しそうな騒ぎへの憧れが動機で、『異変解決ごっこ』として、遊んでいたんです。」

すばる「……　ようするに？」

衣玖「ただの暇潰しですねはい。」
ですよねー、絶対そうだと思った。
すばる「その間衣玖は何してたんだ？」
すると、衣玖は突然赤面しだし、恥ずかしそうに、俺に言い始めた。
衣玖「……　私もその異変に参加していました……」
すばる「はぁ!?」
衣玖「いやだって、だって！私も暇だったんですよ！桃を貪り尽くすか、雲の中を泳ぎ回ることぐらいしか、やることなかったんですから！」
なんだこいつかわいすぎか。
すばる「まぁ分かった分かった……　カオスだったけどな。」
終始カオス、まさにこの事である。最近よくこの言葉を使うのだが……　気のせいか？
すばる「ちなみに暇潰し以外に理由はないのか？」
衣玖「あぁ……　総領娘様は博麗の巫女にやっつけられたかったらしいですよ。……　ドMなんでしょうかね？」
すばる「それは紛れもないドMだ。」
あいつやっぱりドMだったのか。これで確信できたぜ、いつかこれをネタに天子をからかってやろうっと。
きしし、と俺が笑うと、衣玖が気づいたかのように、呆れながら、
衣玖「……　なにか良からぬことを考えているのではないでしょうか……？」
そう言った。うん、なにもしないなにもしない、からかってやろうなんて一ミリたりとも思ってな～い。（棒読み）
衣玖「そういえば明日、総領娘様がすばるさんと一緒に『暇潰しによ～』とおっしゃっていましたよ。」
すばる「天子が？」
衣玖「はい。」
すばる「何するんだ？またどっか行くとしたら、どこにいくんだ？」

霊夢に聞いた話によると、ここ幻想郷は、いろいろな所があるらしい、きれいなところや、おかしいところまで、まぁ俺の場合はほったらかしにされたけどな。あんの貧乏巫女め。

霊夢「くしゅん！……？」
魔理沙「どうした霊夢？……もしかして誰かに噂されてるのか？」
霊夢「……だとしたら誰かしらね？」
いやほんとに誰かしら……まったく。
魔理沙「そういえばすばるはどこにいるんだ？」
霊夢「知らん。」
魔理沙「えっ？」

衣玖「『鈴奈庵』にいくみたいですよ。」
すばる「『鈴奈庵』？」
どこだそこ？人里には見かけなかったし……どこだ？
衣玖「人里にある、外の世界でいうところでは、図書館、と、言ったところですね。」
いや人里にあったんかい。……しかし、図書館か……最近、小説とか読んでなかったし、桃を貪り尽くす暇潰しよりは、まともな暇潰しになるかな？
すると、後ろのドアから、きぃ～とドアが開いた。天子だった。
天子「そうそう、話は大方衣玖が言ってくれたかな？桃を貪り尽くすよりは、良い暇潰しになると思わない？」

すばる「確かにそうだな。俺も最近本を読んでなかったし、その『鈴奈庵』というところにどんな本があるのか気になるし、明日、昼食を食べてから行くとするか。……一応聞くが……さっきまでいない間、何してた？」

天子「桃食ってた。」

すばる「お前やっぱり桃中毒者じゃねぇか！」

天子「小さいことは気にしたら負けよすばる、あ、桃食べる？」

すばる「食べる～！（小並感）」

そんなアホなやり取りを見ていた衣玖は、

衣玖「（本当に……退屈しなさそうですね。）」

桃を食ってる俺らを見ながら、にこにこして、そう心の中で言っていたのだった――――――

第9話　たぬきのお姉さん

次の日の事である。
すばる「お～いし～いなぁ～、しょ～くご～のも～もは～お～いし～いなぁ～♪」
天子「まぁなんともセンスのない歌の事で。」
俺達は昼食を食べたあとに、仙果である桃を貪っていた。適当に歌詞を作って、ムシャムシャとひたすら食べていた。もうこれで5個目だ。まぁ天子と衣玖は毎日30個くらい食べるらしい、もはや中毒どころか、膠原病になってねぇかと心配する。……　いやどんな膠原病だそれ。
衣玖「さて、もうすぐお行きになられるのでしょう？人里の図書館、『鈴奈庵』に。」
すばる「あぁ、そうだな。」
そう、俺は昨日の夜に暇潰しがてら、一緒に『鈴奈庵』に行こうと、天子からの誘いを受けたのだ。丁度俺も暇なので、仕方ねぇ、ついていってやろうということになったのだ。……　なんで俺はこんな上から目線なんだ？↑はっ？
天子「（ムシャムシャごっくんちょ。）ふぅ、食った食った、さて、そろそろ行こうか。私も読みたい本があるんだよね～。」
天子は子供のように早く行こー状態である。とはいえ、気になったことがあった。
すばる「そういえば、衣玖、お前は一緒に行かんのか？」
どうせだったら一緒に行こうぜーと、誘ってみる。答えはノーだった。
衣玖「いえいえ、それこそ私も行ったらここを管理する人がいなくなってしまいます。ですから、お二人で楽しんできてください。私はここで留守番をしています。」
天子「衣玖も一緒に行けば良いのに……　私の誘いとかも、ほとんど断っちゃうんだよね。」
衣玖「申し訳ないです、総領娘様。」

ペコッと、頭を下げる。
天子「ううん、別に謝る必要はないわよ、ごめんね、衣玖。」
衣玖「いえいえ、こちらこそすいませんでした。……　でも、いつかは私も一緒に行きたいです。その時はまた、是非。」
と、衣玖はお願いをする、それに対しての答えは。
天子「分かったわ。」
と、答えたのだった。
すばる「そんじゃ、そろそろ行くとしますか。」
そろそろ行こう、とさすがに思い始め、出発の支度をし始める。天子も支度をし、二人とも準備万端の状態だ。
天子「それじゃあ、行きますか。『鈴奈庵』へ。」
すばる「そうだな。」
天子「私は空を飛んで行くから、あんたはパッチンで先に行ってていいわよ。」
すばる「いや、その必要はない。」
そうして、今にも飛び立ちそうな天子を止める。
すばる「実は最近、まぁ少し似てるが新しい技を覚えたんだ！」
今日はそれを試すとき……　むふふ。
天子「へぇ、珍しい。どんな技なの？」
天子が質問してくる。
すばる「いっしょに瞬間移動するんだよ、それも人とする事ができるようになったんだ。つーわけで、天子、俺の体に掴まってくれないか？どこでもいいぞ、肩や頭、手を繋いだっていいぞ。」
すると、天子は顔を赤く染め、恥ずかしそうに、そして動揺して
天子「ばっ、ばばばばばばかじゃないの!?、て、手を繋ぐなんて！」
なぜだ？なぜどうして手を繋ぐ事を拒否るんだ！あ、もしかして俺の手が臭いから？……　泣きそう。
天子「こ、こここは無難に、か、肩に掴んどくわ！」
そう言って、俺の肩に天子の手が乗っかる。……　初めて思ったけど、天子の手、ちっちゃいな。小さくて、片手で握り潰せそうな、そんな手だったのだ。

すばる「よし、掴んだな…………………… それじゃあ衣玖。」
いま一度、衣玖の方に向いて
すばる「行ってくるわ！」
俺の後に続いて、天子も。
天子「い、行ってきます……」
まだ少しだけ顔が赤いご様子。それでも衣玖は、笑顔で
衣玖「はい、行ってらっしゃいませ。お二人とも、楽しいひととき
を、過ごしてきてください。」
そうして、俺は、俺の肩に掴まっている天子を連れて、人里に向かっ
て、指パッチンをしたのだった。
一人残った衣玖は
衣玖「はぁ………… 行っちゃいましたか。」
それだけいって
衣玖「………… 桃でも食べますか。」
そう言って、仙果の桃を二個ほど取って、それを食べながら、雲の
中に溶け込むように消えていくのだった――――
。

――

一方俺達は、人里の中を歩いていた……………… だがここで天子
が言う。
天子「ねぇ、すばる。」
すばる「んっ？」
天子「腹減った。」
すばる「えっ？」
天子「えっ？」
すばる「いや、天子…………………… お前さっき昼食食ったばっ
かだろ。……… 桃も7個ぐらい食べてたし、もう腹減るって、お
前の腹はブラックホールか何かですか？」

いやもうこいつのお腹ブラックホールだろ。食べ物食っては銀河に放り捨ててるのか？
天子「いやほら、腹が減っては戦はできぬってよく言うじゃない。まさしくそれよ、私は今その状態に陥ってるわけよ！」
見苦しい言い分だなぁおい。……　まぁいいか。俺も若干小腹空いてたし、それを満たすのに丁度良い物……　んっ、あそこで焼き鳥売ってるじゃないか。丁度良い、あそこで小腹を満たせる事にするか。
すばる「すいませ～ん、その焼き鳥っていくらしますか？」
？「あら、いらっしゃい。焼き鳥を買いに来たの？……」
二人には焼きたてをあげましょう。少し待っていてくれるかのぉ？」
焼きたてをくれるみたいだ。それはとてもありがたいことだ、最近フ○ミマ行ってなかったからな～。しかも、焼き鳥を焼きたてでくれるというのは、非常に稀なのである。だいたいは、そのまま焼いていたものを渡すはずだが……　この人が優しいだけなのか？
天子「それじゃあ私は先に団子食べに行ってくる！できたら後でこっちに持ってきといて！」
すばる「あっ、おいちょっと待て……　行っちまった、どんだけ腹減ってんだあいつ。」
？「ほっほっほっ、元気がいい娘さんじゃのう。」
すばる「あはは……　そうですね。」
？「……」
すばる「……」
？「……　お主、『山口すばる』じゃな？」
すばる「えっ？何で知って……」
それと同時にボンッ、と何かに変身した。驚いた、さっきまでしわくちゃなおばあちゃんから、きれいなお姉さんに変わっていたのだ、頭の上には、葉っぱが置かれていた。
？「お主のことは、博麗の巫女から、色々聞いておる。性格や顔、お主の能力についてもな。」
まさか霊夢と会っているなんて、何者なんだ、この人は？

すばる「驚きました……　まさかさっきしわくちゃだったおばあさんから、一気にきれいなお姉さんに変わるとは思いませんでした。」
？「ほっほっほっ、とはいっても、もう年寄りだがのぅ……体がゆうことを聞かんわい。」
すばる「どうやって変身したんですか？」
変身の仕方がどうしても気になってしまう。大方あの葉っぱが関係しているとは思うが……
？「ほっほっほっ、わしは狸の妖怪じゃからのう。この葉っぱでどんな姿にでも変えることが出来るんじゃ、お主にもなれるし、博麗の巫女にもなれる。……　もちろん、お主のつれの天人だって、なろうと思えばなれるぞい。」
すばる「天子のこと、分かっていたんですか？」
？「あぁ、わしも妖怪じゃからのう……　かれこれ１００年以上は生きてるわい、あの天人にも、何回か交流したことがあったわい。」
天子と同じく１００年以上生きてるのか。皆それぐらい生きてるってことなのか？とはいえ、霊夢や魔理沙はただの人間だったし……　ここは本当に不思議な場所だな。
？「……　すばるよ。」
すばる「はい？」
突然呼ばれたので、訳も分からず返事する。
？「……　の前に、先にわしの名前を名乗っておこうか、わしの名前は二ッ岩マミゾウ、まぁさっきいった通り狸の化け妖怪じゃ。」
すばる「ご丁寧に、ありがとうございます。」
マミゾウ「ではさっき言おうとしたことじゃが……　お主は『死神』をご存知か？」
すばる「死神……　ですか？」
死神……　主に不幸をもたらす奴のことだよな？まさかここ、幻想郷にいたりするのか？

マミゾウ「その様子じゃあまだ会ったことないのじゃな。」
すばる「死神って、この幻想郷にいるのですか？」
マミゾウ「あぁ……　主に天界にな。」
!!、天界にそんなやつが出るのか!?おい待て、天子も衣玖からもそんな事聞いてないぞ。なんで言ってくれなかったんだ。
すばる「その死神ってやっぱり襲ってきたりするんですかね？」
マミゾウさんはこくっ、と頷いた。まじか、結構やばいんじゃねぇかそれ？
マミゾウ「最近な……　どこか禍々しい気を感じるんじゃよ。しかもかなりのな。」
すばる「どこから感じるのですか？」
質問したが、マミゾウさんは、首を横にふりながら
マミゾウ「分からない……　ただ、昔のよりもかなり強く感じるのじゃ……」
怖いな、それ。分からないか……　死神の気ってどんなんだろう？やっぱり、気持ち悪いのか？……　わかんねぇや。
マミゾウ「お主は、天人がなぜそこまで長生きするか、知ってるかのう？」
すばる「いえ……　分かりません。」
マミゾウ「じゃろうな。」
そういえば天子も衣玖もその事は言ってなかったな。
すばる「仙果のお陰だからですかね？」
マミゾウ「まぁそれもあると思うのじゃが……　単に死神に負けてないからなんじゃよ。」
すばる「もしも負けたら、どうなるんですか？」
マミゾウさんは、少し言いずらそうに
マミゾウ「……　死ぬんじゃ。」
すばる「!!」
マミゾウ「それも、天国にも地獄にも行けやしない……　その先にあるのは、ただ真っ暗な空間だけ、自分が生きてるか、死んでるかも分からずに、永遠にそこにさまよい続けるのじゃ……」

恐ろしい、負けるとそうなってしまうのか。俺は鳥肌がたった。ただ真っ暗な空間をさまよい続けるとなると……　考えるだけでも頭がおかしくなってくる。

マミゾウ「今までは、ずっと追っ払って来たから良いのじゃが……　今回はそうはいかんかもしれん。あまりにも気が禍々し過ぎるんじゃ。」

俺は、自分の手を見た。……　この手でなんとかできたりはしないのか？

マミゾウ「……　お主は、死神に勝てる自信はあるのかのう？」

すばる「……　分かりません。」

なんともいえん、まだこの能力事態はまだ慣れていない、今のところ、戦闘できるような効果も持っていない。

マミゾウ「お主の能力は、だいたい博麗の巫女から聞いておる……　ひょっとしたら、幻想郷の中でも、トップクラスを誇るほど強いんじゃ。」

すばる「そうなんですか？」

自覚がない、そもそもただの指パッチンだぞ？それがトップクラスって……　考えられん。

マミゾウ「……　お主の能力は桁違いに強くなる。いろいろ試せば、いろいろな効果が発揮できるじゃろう……　お主は、天人達を救えるかもしれんのじゃ。」

すばる「俺が救う……　？」

この手で、誰かを救うことができるのか？俺にそんな才能があるのか？ただ、ひとつ言えることは

すばる「努力してみます。」

それだけだった。

マミゾウ「……　おっと、長話しすぎたのぅ、丁度焼き鳥も焼きあがったぞい。」

スッと焼き鳥を2本手渡してくれた。

すばる「わざわざありがとうございました。おいくらですか？」

財布を取り出して、お金を払おうと思ったが

マミゾウ「いや、いい。」

と、お金を貰うのを断ったのだ。

マミゾウ「今日は特別じゃや、お主にも会えたからのぅ、持っていけ。」

すばる「…………………わざわざ焼いてもくれ、そしてタダで焼き鳥をくれて、ありがとうございます。」

マミゾウ「いいってことじゃわい。」

ほっほっほっと笑うマミゾウさん、この人はとても優しいお方だな～と心の底から思うのだった。

マミゾウ「お主…………あの天人を、頼んだぞ。」

それに対しての返事は

すばる「はい、任せてください。」

俺はそれだけ言って、焼き鳥二本を持ちながら、天子のところに向かうのだった。

マミゾウ「…………さて、どうなるかのぅ。」

一人残されたマミゾウさんは、そう呟いたのだった――――。

第１０話　いざ、鈴奈庵へ

すばる「焼き鳥、持ってきたぞー！」
天子「わーい！」
天子は、無邪気に喜びながら、俺が渡した焼き鳥を頬張っていた。さっき団子食ったとは思えないほど、よく食べていた。俺も焼き鳥をもぐもぐ食べながら、さっきマミゾウさんが言っていたことを思い出していた。
すばる「（……死神、か。）」
マミゾウさんは、もうすぐで死神がやって来るでだろうと、俺は警告を先ほど受けていた。どうやら、今回はかなりの禍々しい気を感じるほどの死神がやって来るらしい。……天子と衣玖はその事について知ってるのだろうか？いや、知っているとするならば、今からなにかしら対策してもおかしくないはずだ。それでも、天子は『鈴奈庵』に行こーと、誘ってきた。それを考えるとすると、やはり気づいてはいないのか？天人だったら、気づいてそうな感じがするんだかな。でも、実際俺も、マミゾウさんに言われるまでは気づかなかったのだ。いや、人間だから当たり前とは思っている。でも、俺も頑張れば、マミゾウさんみたいに気を感じることは、いつか出来るかもしれない。そう考えると、やはり能力を色々開発していくしかないのだろうか？天界を守るため、天子や衣玖を守るため、そして、幻想郷を守るために。
天子「ねえすばる、どうしたのって、さっきから言ってるじゃない！」
俺が長々と考えていたせいか、天子がずっと俺に呼び掛けているのを、気づかなかったみたいだ。
すばる「あぁ……ちょっとな。」
天子「どうしたのよ、らしくない。いつもカオスなあんたが考え事しているなんてね。」
おい貴様さらっとカオスって言いやがったな！お前には言われたくないんだが。焼き鳥を食い終わった俺は、そう突っ込んだ。

すばる「そんじゃ、腹一杯になったことだし、いい加減に行くか、『鈴奈庵』に。」

天子「行くの遅くない？」

すばる「誰のせいだ誰の。」

紛れもなくお前のせいだろうが、まったく。そう心の中でぶつぶつ言いながら『鈴奈庵』に向かうのだった――――。

天子「さ、着いたわよ『鈴奈庵』」

すばる「…………………ここが。」

ここが『鈴奈庵』ていうところか、予想してたよりはちっさくて、でも、中身が綺麗で、本棚にぎっしりと本が詰まっている、いろんな本がありそうだ。

すばる「お邪魔しま～す。」

俺が言うと、奥の方からとことこっと、走ってきた小柄な女の子が俺に近づいてきた。

？「いらっしゃいませ！…………………あれ、天子さんじゃないですか？お久しぶりですね！」

天子「こんにちは、小鈴ちゃん。久しぶりに来ちゃった！」

すばる「あれ、天子、この人と知り合いなのか？」

天子はこの人と何回か関わりがあるみたいだ。結構顔が広いんだなー。

小鈴「…………………あれ、ひょっとしてそちらの方は…………………最近幻想入りした、『山口すばる』さんじゃないですか！（わぁ、割りと顔がきれい！）」

すばる「あれ、俺のこと知ってたの？」

小鈴「はい！お話は、霊夢さんから聞いていますよ、指パッチンで能力発動するって、面白い能力ですね！」

なんか知らんけどひそかにバカにしてますそれ？それに、霊夢はどんだけ顔が広いんだ、いろんな人と喋りまくってるな。
小鈴「それで、今日はどんな本をお探しに？」
天子「どんなとかはないわよ、単に私たちは本を読みに来ただけよ。」
すばる「まぁ、そういうとこかな。」
小鈴「分かりました、どうぞごゆっくり。」
それから俺達は、いろんな本を探し始めた。ここには、外の世界の図書館みたいに、いろんな本がある。小説はもちろん、漫画などもある。恋愛系や医療系、探偵系の本もあり、種類が豊富だ。そんな中、俺はとある本に目が止まった。
すばる「おっこれは……　俺が外の世界で読んでた『出来損ないが勇者になる話』じゃねぇか！こんな本、どこで手に入れたんだ？」
すると、小鈴が驚いたように言うのだった
小鈴「あれ、その本をご存知なのですか？珍しいですね、人里の人達は一切気にしないのですが。」
どうやら、人里の人は知らんみたいだ。まじで？これめちゃくちゃ面白いんだけどな。
小鈴「あなたとは話が合いそうですね！その本はあなたの言うとおり、外の世界から取り入れたもので、私もよく読んでいましたよ。作者さんが完成次第、こちらに入荷してるんですが……あ、そういえば昨日『出来損ないが勇者になる話』の２６巻出ましたよ！読みますか？」
すばる「まじで？読む読む！」
そう言って、小鈴から『出来損ないが勇者になる話』の本を受け取り、読み始めた。やっぱこれ面白いなぁ～。そう思っていると、天子は興味があるのか、ひょこっと覗いてきた。
天子「それって面白いの？二人の間では、話題になってるみたいだけど。」
やっぱり天子も気になるのか。うんうん、分かるぞその気持ち、

やっぱり読みたくなるよなぁ～。
すばる「なんなら少し読んでみるか？」
天子「……　読んでみるわ。」
そう言って、俺が渡した本を読み始めた。ペラッペラッと、その音だけが店中に響き渡る。大雑把に読み終わった後、パタンと本を閉じて、天子が
天子「面白いわねこれ！こんな本が外の世界にあったなんて、私感激だわ！」
すばる「分かってくれたか天子！この本の良いところが！」
天子「うん！この本はいい感じに話が仕上がっているわね！見てて面白いと思ったし、なにより話の続きが気になる終わり方になるから、興味が湧いてきたわ！」
天子もご満足な様子、相当面白かったようだ。
天子「これって借りれるかしら？小鈴。」
相当気に入ったのか、小鈴に借りたい宣言をし始めた。
小鈴「はい、借りることはできますが……　何冊借りますか？1巻から26巻までありますが、どうしますか？」
天子「10冊借りる！」
すばる「おい待てそれ完全にガチ勢じゃねぇか！」
天子もついにガチ勢に目覚めたか。……　俺みたいに変な道だけは進むなよ……　頼むから。
？「さっきから騒がしいわね、本を書くのにも集中出来ないじゃない。」
店の奥の方から、ひょこっと顔を出した人がいた。紫色の髪の子で小鈴と同じく、小柄な体型だ。
？「んっ……　あなたは、もしかして……　すばるよね？」
ちょっと待てなんであんたも知ってんだ。
小鈴「え、阿求も知ってるの？すばるさんのこと。」
阿求「ええ、知ってるわよ。彼、人里では有名人なのよ。」
小鈴「そうなんだ！知らなかった！」

いや待て待て待て待て、いつの間に俺のこと人里中に広まってんだ？俺が「俺様が山口すばる様だぞー！俺様に金くれー！」なんて、やったことがない。というかあるわけないだろそんなもん。なんてことを思っていると

阿求「貴方のことは、霊夢さんから聞いているわよ。そして、すばるの事は、私が勝手に人里に広めたわ。」

すばる「あんた勝手になにしてくれてんだ。」

そんなに言うことでもないだろ！と、心の底からそう思った。

阿求「あ、そういえば小鈴、また新作が出来上がったわよ。」

小鈴「ほんと!?見せて見せて！」

そうして、阿求は小鈴に本を手渡した。……　何故かは知らんが小鈴の顔が妙にニヤニヤしていた。……　どんな本を作ったんだ？阿求は、……　少し追及してみるか。

すばる「……　ちょっとそれ見せてくれないか？」

そう言うと、小鈴は顔を赤くして

小鈴「だ、ダメですよ！これだけは……　その……　あなたは読んでは駄目というか……　そんな感じですから……」

すばる「……　ふ～ん？」

一体何を読んでるんかな～？……　仕方あるまい、奥の手だ。

小鈴「……　えっ!?本が！本が急に失くなったんですけど!?」

そう言って、俺の方を見る。

小鈴「あっ……　一体どうやって!?」

先ほど小鈴が読んでいた本は、俺の手の中だった。

すばる「いやぁ～めちゃくちゃ何読んでるか気になってね。ちょいとばかり、能力を使わしてもらったよ。」

小鈴「や、そっ、それを返してください！」

俺は小鈴を無視して、かってに本を開いた。

すばる「……」

…………………　なんだこれは。
小鈴「あの、それは…………」
すばる「…………『美男美女の熱い夜』…………『俺の彼女は〇〇だった件』…………」
阿求「どう？私の自信作、すごいでしょ！」
…………　消した。俺はこの小説をこの指で跡形もなく消した。
阿求「あ～～～～～！なにしてんのよ!?私の自信作が～～～～～～！」
すばる「こんなもん書いてるからだろうが！しかも、よくよく見たら本棚の中にもいくつか紛れているじゃねぇか！こんなもん本棚の中に置くんじゃねぇよ！とりあえずこのヤバい本たちを中にしまえ！こんなもん本棚に置いとくなよ！」
小鈴「え！ダメですよ、これは紳士用で置いてるんですから！」
すばる「とはいえ、正常な一般人が読むところに所々に紛らしてるのはおかしいだろうが！」
阿求「まぁまぁ、別に良いじゃない。」
すばる「誰のせいでこんなことになってると思っているんだ？」
本当に自覚しているのかと疑ってしまう。
すばる「とりあえずこれは店の奥とかに保管しておけ。分かったな？」
小鈴「えぇ…………　別にいいじゃないですか。」
阿求「そうよ、別にいいｚ」
すばる「二人ともこの手で消すぞ？」
「早急に保管させていただきます！」
と言って、店の奥にしぶしぶ持っていた。ずっと会話に入れなかった天子は
天子「…………　これ、いい加減借りていいかしら？」
「あ、どうぞ。」
変態二人が口を揃えて言ったのだった――――――――――。

第11話　規則正しい射命丸です！

天子「内容が深いわ……　この先どうなるのかしら。」
朝のことである、あの天子が小説を読んでいたのだ。それも、コーヒーを飲みながら……　ではなく、相変わらず桃を食いながらであった。そんなやつこの世で天子しかいない、これは間違いない。
衣玖「あの……　総領娘様は一体、なにをお読みになっているのですか？」
衣玖は、天子が何を読んでいるのか気になるらしい。……　とはいえ、なんで桃食いながら聞いてくるんだ？それする必要あるか？……　相変わらずである。
すばる「よく分からん本をお読みになっていますよ、総領娘様は。」
衣玖「さりげなく私のセリフ真似てます？」
あぁ、真似ているぞ。
衣玖「……　まぁ、総領娘様が変な道にいかなければ、私はそれでいいんですけどね。」
すでに手遅れ説濃厚である。
すばる「……　まぁ、俺は外の空気でも吸ってくるよ。」
あんまりここに居ると、部屋中が桃臭くなりそうだ。そう思って、俺は家を出た。外に出ると、太陽が俺を照らしていた。今日は快晴である。というか、常に快晴か。天界は雲の上に出来ているので毎日、朝昼夜は、快晴なのである。まぁ、ようするに天気予報はいらないと言うことだ、やったね。
すばる「気持ちいいな～……　だが俺の視界に写っている前の奴はなんだ？」
俺の視界に写っていたのは、見た目は人間だが、後ろには黒い羽が生えており、少し遠いところで高速移動していた、あちこちに。
すばる「……　何しているんだ？何かの儀式か？」
俺がそう思っていると、突如方向を変え、こちらに向かってき

た。……　向かってきた!?
すばる「ちょちょちょ待て待て待て待て！」
と言っても、止まってくれる気配がない。いやでも人がいる方向に普通突っ込んでくるか？……　あっよく見たら新聞持ってるわ、ご親切に届けてくれてありがとう……　じゃなーい！
？「ダイレクトー……」
すばる「へっ？」
？「シュート！」
と言っては、俺に突っ込み、俺をぶっ飛ばして、後ろのポストにダイレクトシュートさせた。ポストにはしっかりと新聞が入っており、地味に上手い。と、俺は思ってしまうのだった――――――

すばる「というか、お前は人間なのか？それとも妖怪なのか？あんな高速移動できる奴、幻想郷中探してもいないと思うんだが？」
ふっふっふ～と、笑うカラス人間、何がおかしい？すると、手に持っていたカメラを俺に見せつけながら、自分の名前を名乗るのだった。
？「それは、私が幻想郷一のスピードを持つ、規則正しい射命丸だからですよ！
射命丸、か……　霊夢が新聞読んでたときに、何でかは知らんけど「射命丸め～！」って言ってたな……　何故だ？
？「あ、射命丸って呼ばれるの飽きちゃったんですばるさん、私の下の名前は文って呼びますんで文って呼んでくれませんか？」
すばる「いやそれ自分で言います？というか、ちゃんと最初からフルネームで紹介しろよ。」
文「え～……　だってめんどくさいじゃないですか。」
文って呼ばれてほしいのか呼ばれてほしくないのかどっちなんだ貴様は。と、俺は内心そう思った。
衣玖「とにかく、ダイレクトシュートで新聞を入れるのはやめてくださいよ……　家が壊れるんですから。」
すでにいろいろ壊れる音がしたんだがな？
文「それはそうとすばるさん！」
すばる「んっ？」
何を聞いてくるんだ？そのまま自分の家に帰ればいいのに。
文「あなたって最近幻想入りした人ですよね？だったらあなたの生活習慣を取材していいですか？」
すばる「はぁ!?」
だめに決まってるだろ、だってそれいわゆるストーカーって奴ですよね？こちとら1日中監視されるのも嫌なんですけど？
すばる「ダメに決まってるだろ？プライベートなんだから、それにこっちがかなり迷惑なんだが？」
文「むぅ……　仕方ないですね。じゃあこれなんだと思

います？」
文は、自分のポケットからひらりと一枚の写真を出した、それを俺と天子に見せつけるように。
すばる　天子「!?／／／／」
俺達は顔を真っ赤にした。だって、目の前にあった写真は、俺が天子に馬乗りしている写真だったからだ。
天子「ちょっと!?／／／なんでそんな写真持ってるのよ!?」
すばる「というかいつ撮ったんだそれ!?／／／」
衣玖「わぁ、撮ってたんだ、馬乗りしてる写真！」
すばる「衣玖！貴様もあん時見てたなー!?」
衣玖「しまった！ばれてしまいましたわ！」
どこで見ていたんだ、こいつらは!?
文「ふっふ～ん、私がたまたま天界のほうに通っているときに、偶然この光景に遭遇したんですよね～。それで、この写真をいつ載せるか迷ってたんですよね～。」
悪魔だ、こいつ悪魔だ！
文「もしもすばるさんが、自分のプライベートを新聞に公開していいならこの写真は新聞に載せません。でも、それでも嫌な場合は……　さて、どうします？」
悪魔だ、こいつ悪魔だ！（２回目）
天子「ちょっと！私たちにとって何にも得がないじゃない！ほかに条件はないの!?」
すばる「そーだそーだ！俺たちに何にも得がなかったらつりあわないだろ！」
文「と言ってもですね……　うーん。」
文はしばらく考えた後、俺に向けて、挑戦を出してきた。
文「すばるさんが私を捕まえられたらこの内容はどちらともチャラにさしてあげますよ！」
と、俺におそらく無理難題な挑戦を出してきたのだった――――――

天子「えっ!?無茶よ!射命丸はただでさえ幻想郷一早いのに、それをすばるにやらせるなんて!」
衣玖「そうですよ射命丸さん!すばるさんは指パッチンしか出来ないのですよ!?」
さらっと失礼なことを言うんじゃない、衣玖。
文「でもこれ以外に良い条件ないですよ?これでもマシな条件出してるんですよ?」
天子「あんたねぇ……　あの霊夢でさえもあんたのこと捕まえられないのに、すばるでどうやって捕まえればいいの?」
俺は思った……　ひょっとしたら瞬間移動を利用すれば、戦闘出来るんじゃねぇか?……　試してみるか。この能力が強いということを文に見せつけてやるんだ、俺
すばる「……　確かに悪くねぇ条件だ……
受けてたとうじゃねぇか。」
衣玖「えっ!?」
文「……　良いじゃないですかそのノリ……　後悔しても知らないですよ?」
すばる「……　こっちのセリフだね。」
そう俺が言った後、文は勢い良く飛んで、ものすごいスピードで俺達の上空を移動し始めた。
衣玖「……　あれは瞬間移動か何かですか?」
知らん、ただあいつが速すぎるだけだ。
天子「ちょっと、やっぱり無理しない方がいいよ、すばる……　万が一新聞に載っても……　大丈夫だから。」
天子は不安なのか、俺を止めようとしてくる。まぁ実際危ないんだろう、だってあれ瞬間移動とほぼ変わらんで……　でも、俺は

すばる「安心しろ天子。」
ただそう一言だけ天子に言って、文の方に向いた。
すばる「(よく狙え……　俺には瞬間移動だけが武器じゃない……　そう、俺には右手だけじゃない、『左手』もある！)」
……　そこだ!!

文「ははは、瞬間移動でも私を捕まえるのはむずk……　!?」
私は驚いた、何故すばるさんは私の進行方向にいるのですか!?そして……　何故左手を構えているのですか!?
すばる「いいか、一つだけ教えておこう。」
すばるさんは、空中で教えてくれた。
すばる「俺、カラテ習ってたから、そこそこ戦えるんだよねー」
そう言って、飛んでる私を、死なない程度に背中にパンチするのだった――――――――――――――――――――。

文「……　で、どうしてあなたは生きてるんですか。」
背中をさすさすしながら文が言った
すばる「あぁ……　簡単なことだ。」
俺は文に手を見せながら言った
すばる「雲に叩きつけられる前に、瞬間移動すればいい話なんだよ。」
文「……　どこまで強いんですか、その能力。」
文は悔しいのか、落ち込みながらそう言葉をこぼした
天子「とはいえ無茶しすぎよ！一瞬まじで死んだかと思ったじゃない！」

天子は怒りながら……　そして、心配しながらそう言った。
すばる「あはは……　ごめん。」
衣玖「ほんとですよ、すばるさんが失敗してたら、新聞一面に馬乗りの写真載せられてたのに。」
すばる「よーし衣玖？後で家の裏に来い。」
天子「まったく……　ほんとに。」

私は驚いた、あの能天気なすばるが、ちゃんと考えていたなんて……　すばるは指パッチンだけが取り柄なんかじゃない。だって……　瞬間移動してたと同時に左手でパンチするなんて……　タイミングと勇気がないと、ほぼ『あの世行き』だった。どんだけ私に心配させるのよ……　でも、これだけは言えることがある。
私は、衣玖に怒っているすばるを見ながらこう思った
……　あんたが太陽を後ろにしてパンチしていた姿……　カッコ良かったよ――――――